

# 第3章

## ちえのわ農学校

### サークルちえのわ

#### <基本理念>

\*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。

\*人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

\*知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。



## 第3章 農学校

菱井優介 菊池香歩 櫻井優介 大友憲幸 森住芽衣 森岡小晴 住友香葉

自然文化誌研究会でいう「農学校」とは、東京学芸大学の環境教育研究センターと農園を利用したの小学生向けの食農体験活動の総称です。具体的な活動については「黒澤友彦・菱井優介・西村俊（2023）. ”ちえのわ農学校小史”. 民族植物学ノート第16号:32-46」にまとめてあるので、そちらをご覧ください。[http://www.ppmusee.org/userdata/oto\\_No16.pdf](http://www.ppmusee.org/userdata/oto_No16.pdf)

50周年記念誌に際しては、「農学校」と「ちえのわ」設立までの経緯と、この「農学校」に関わってきた人たちの思いに耳を傾けた座談会の内容を紹介します。

### 3-1 農学校の創設期をふりかえって

私が「農学校」という言葉をはじめて聞いたのは、2002年4月のことでした。木俣先生にA3の企画書を渡され「東京学芸大学公開講座『ぬくい少年少女農学校』を開催したいからスタッフを募ってくれないか」と声をかけていただいたのです。その後、自主ゼミや有志の大学生、地域の方が集まり説明を受けました。その趣旨はそれまで行ってきた、公開講座「子どものための冒険学校」（全13期：1988～2001）の形を変え、農園を活かした冒険学校の常設化を試みであり、農耕文化基本複合「種から胃袋まで」（中尾佐助）を体現できる活動を年間通じた活動を行う構想にワクワクしました。

1期目は、開催前に有志の勉強会を何度か開催し、議論も白熱し、話をまとめるのに苦労した覚えがあります。一回一回の活動を手探りで作り上げて、駆け抜けた印象です。

2期目からは、自然文化誌研究会の面々が全面的にかかわるようになり、有志の集りから農学校スタッフとして組織的に動けるようになりました。

3期のスタートとともに、次年度の大学公開講座としての「農学校」開催は危ぶまれていたので、並行して、どのように活動を継続していくかの検討をしていました。自然文化誌研究会

の事業としての継続案もありましたが最終的には、大学での実践には、学生主体であること、教育実践の場として機能させる必要性を鑑みて、学生サークルを立ち上げる方向でまとめ、サークル「ちえのわ」を創設するに至りました。私自身、自然文化誌研究会にとって「農学校」は「冒険学校」を常設化する試みであったし、サークル「ちえのわ」にとって「農学校」は、農的な環境を活かした教育実践の手段であると捉えています。あえて「ちえのわ農学校」というサークル名にしなかったのは、「農学校」を手段の一つと捉え、従来のやり方にこだわることなく、参加者と関わる学生にとってよりよい活動を突き詰められるようにというこだわった点でした。

2001年の「子どものための冒険学校」から「ぬくい少年少女農学校」へ、そして「ちえのわ農学校」と名前は変わっても、あのコロナ禍も乗り越えて、学生中心で「農園での冒険教育、野外環境教育の実践」を続けてくれていることを誇りに思います。50周年記念誌に寄せて、今につながる農学校スタッフたちの思いを残せたらと思い座談会を開催しました。次項はその様子をお伝えします。（菱井優介）

## 3-2 農学校座談会

2025年6月10日と6月18日にオンラインで開催した座談会から抜粋しまとめました。  
まずは、メンバー紹介と一言です。

---

名前(ネーム) 菱井優介(ひっしー)  
所属と役職 F類環境教育 めくい1期~3期 ちえのわ1期 代表  
一番の思い出 1期をやり終えた後に寝転んで見上げた多目的室の天井  
好きな活動 田植え、脱穀  
後輩へ一言 これまで農学校を続けてくれてありがとう

---

名前(ネーム) 菊池香歩(かほやん)  
所属と役職 A類国語 大学3年生の時に、ちえのわ13期で代表を務めました。  
一番の思い出 8月農学校で環境センターの多目的室に子どもたちと1泊。稲を守るために捕まえたイナゴを、2日目の朝に佃煮にしたこと。子どもと一緒にドキドキしながら命をいただいた経験、貴重だったな~と覚えています。  
好きな活動 もちつき、竹工作、わら工作、自然ビンゴなどなど、いろいろあります。  
良いところ 子どもとかおとなとがなく、みんながごちゃまぜになって過ごせること。  
後輩へ一言 子どもに教えるのではなくて、一緒に遊ぶのが大事!(大人としてリスク&ハザードは考えた上で)授業の合間やお昼休みに農園に行っていたから、よりちえのわを好きになったなと思います。

---

名前(ネーム) 櫻井優介(ゆうすけ)  
所属と役職 B類理科 15期?代表  
一番の思い出 採れた夏野菜を使ってカレー作り!  
良いところ 子どもも大人も日常の中では得られない知識と経験を得られること  
後輩へ一言! 大変だけど、自分なりの価値を見つけて頑張って!

---

名前(ネーム) 大友憲幸(のり)  
所属と役職 A類環境教育 18期  
一番の思い出 コロナ明けの、子どもを呼んでの初めての農学校。めちゃ緊張した  
好きな活動 農園散策一択  
良いところ やりたいことをやりたいようにできる場所  
後輩へ一言! 農園で遊べるだけ遊べ

名前(ネーム) 森住芽衣(めい)  
所属と役職 A類環境教育 18期  
一番の思い出 クリスマスのイルミネーション、キャンドルでの飾り付け  
好きな活動 土絵の具、田植え  
良いところ 日常とは違う仲間たちと一緒に五感で自然を楽しむことができること。  
後輩へ一言! 失敗を恐れずやりたいことは全力でトライしてみてください!

名前(ネーム) 森岡小晴(こはるん)  
所属と役職 A類環境教育 18期 会計  
一番思い出 お泊まり農学校  
好きな活動 竹を組み立てて作るそうめん流し  
良いところ 子どもと大人が一緒になって、自然体験を楽しめるところ  
後輩へ一言! 楽しんでいけば経験値は増えていく!

名前(ネーム) 住友香葉(かよ)  
所属と役職 A類環境教育 新歓係、事務局で 20期は代表を務めています  
一番の思い出 お泊り農学校  
好きな活動 ヤマメをさばくこと  
良いところ 子どもたちの好奇心や興味に触発されて、私自身もさまざまな発見や経験ができること。  
後輩へ一言! 一緒に農学校を楽しみましょう!

以上7名でお届けします。

## ● 印象に残っている活動や農学校の思い出・魅力は？

### ▶ ひっしー

まずは、それぞれの農学校の思い出、印象深かったことを教えてくださいと、いってもすぐに話せるわけじゃないと思うのでまずは私から話させてもらいますね。

餅つき今でもやってるよね。1期目の農学校、最後の12月活動で餅つきをやった後に鏡餅を作っていたら、突然、

「これは鏡餅なんかじゃないっ」

「いや、これが本物で、お前のは偽物だ」

「僕が知っている鏡餅はプラでできて、底をパカッと開けると中から切り餅が出てくるんだ」

言い合いがヒートアップして殴り合いのケンカにまで発展。あれはいろんな意味でびっくりした。手が出たこと自体も驚きだったけどそ

れ以上に、子どもに魚を描かせたら切り身が泳いでたって話に似てて、これまで本物に触れる機会がなかったことで、プラの鏡餅が当たり前になっている現実。

本来の鏡餅はこういう物だよって示すことはできたけど、その子の常識は覆らなかった。プラスチックの鏡餅をホンモノと認識している子がいる現実をまざまざと見せつけられた経験は、私の体験活動の指導者としての原点になってるね。

#### ▶ ゆうすけ

記憶に残っていることは、ちえのわの仲間は、今でも付き合いが続いていて、いい出会いだったな、と。もともと教員志望ではなかったし、子どもと遊ぶってこうやるんだ、とか、じゃれあいの中にこんな意味があるんだ、とか参加者との接し方をゼロから教わった。子どもの教育、子どもに対する思いを知る機会だったなあ。

#### ▶ めい

コロナでリアルで活動できなかった時に、けん玉づくりをやったのが印象的です。

ちえのわでは、子どもとのかかわり方を学ぶことができたと思ってます。大学は教え方が中心で、実際に子どもと向き合う時間はなかったし。子どもたちと直接ふれあえて、関わり方を考える機会はとてもよかったです。

あと、余白の時間が大事だなあって。活動の合間で農体験が深まっている気がします。やることを詰め込みすぎて、そういう時間がないのはもったいないな。

農園ならでは、っていうのもあるのかな。畑があって田んぼもあって林もあって、本当に色々なものが住んでる場所。それに触れやすい環境だったんだなあ。あと、たけのこ掘り！楽しかった！今思い出しました。

#### ▶ のり

子どもたちの純粋な興味に立ち会うことができたのが一番良かったこと。いっしょに同じことをやって、農園にいろんなものがあるって、気づくことができた。自分がやりたいことをできる。そこに触れることができた。

特に印象深かったことと言えば、農園での宿泊、明け方に見回っていたら、参加者2人が救急車みたいな音がして眠れないと言うので、一緒に音の正体を突き止めに行きました。鶏小屋でした。コケコッコーと鶏の鳴き声を一致させることができて、そのあと10分以上3人で鶏の様子をじっくり観察したんですよ。「あ、なんか食べた」とかすごくいい時間だったなあ。

#### ▶ こはるん

毎年8月あたりにやっている「流しそうめん」はすごく好きなんです。何が好きかというと子どもたちの笑顔を真正面から見ることができ、思い出深いですね。そうめんを流す側に立つと子どもたちがすごい笑顔で待ち構えてるんです。

でもまずその竹を組み立てて土台をつくることから子どもたちと一緒にやって、さらに自分たちの育てた今取れた夏野菜も一緒に食べて、ほんと夢みたいに感じましたね。都会だとなかなかできないし、子どもたちがいくらやりたいって言ってもなかなか実現は難しいものでも、こうやって大人がいて、ものがあるって、それを組み立てる技術を持ってる人がいて、一緒にできるっていう体験ってすごくいいものだなあと思ってます。すごく企画するのが楽しかったですし、やっぱりその証明にそうめんを待ち構えてる子どもたちの笑顔が最高でした。

#### ▶ かほやん

いろいろあるけど食べ物のお話でいえばイナ

ゴかな。私にとっては、結構印象深くて。

8月に農園に1泊した時、1日目に稲の外敵退治だってイナゴを捕まえてペットボトルに入れておき、朝に調理するのを、やってみたい子を集めてやってみました。売られてる昆虫食って抵抗感あって結構ハードル高いですけど、自分の手でさばくというか調理して食べたのは、本当に命を感じるし、なんかすごく大事な経験だったな。

▶ かよ

田んぼでの活動がすごく印象的です。

子どもたちがバーって飛びついて、田んぼの中にいる生き物、カエルとか捕まえて見せてくれたりってというのがすごく驚きでした。私は、大学生になって初めて田んぼの中にはいったし、そこにこんなにたくさん生き物がいるって事も知らないし、子どもが嫌がりもしないで、

生き物とふれあう姿を見て、逆に自然との関わり方を学んだ気がします。子どもだけじゃなくて大人も一緒に子どもと自然との付き合い方を学ぶところが農学校のいいところだなと思ってます。

▶ かほやん

そう、聞いてて思い出した！私、今アマガエルが大好きなんです。それはちえのわで子どもたちに「ちょっと持ってて！」と、突然手のひらにカエルを乗せられたことがきっかけでした。

子どもの頃もカエル好きだったけど、だんだん触れなくなって中学生、高校生と大人になるにつれて縁がなくなって、でも田んぼのきっかけでカエル愛が再燃しました。今では自作のカエル帽子つくるくらいですから。ちょっとしたきっかけ、触れるってすごい大事ですよ。

## ● 理想の農学校とは？

▶ ひっしー

ここからはテーマを変えて、今改めて思う理想の農学校とは、について考えてみましょう。こんなことやりたいな、やってみたかったな、ということをお話してください。卒業生が多いので、妄想に近いかもしれませんが、どんなことやったら面白いかについてご紹介ください。

▶ ゆうすけ

理想とかやりたい活動はすぐに思いつかないけど、当時思っていたのは、子どもたちの「たのしい」を優先していたから、楽しくないからやりたくないという場面があった。農業って、楽しい作業だけじゃないし、ちょっとしんどい農学校というか、やらなきゃ、の活動があってもよかったな。結局、活動中に作業が終わら

なくて、学生がやってしまうみたいなこともあったし。ちょっとしんどいこと、重労働、ちょっと一人では無理、手分けしてやろうみたいな味のちがう農学校があってもよかった。楽しいことを優先しないパターンもあってもいいんじゃないかな。

あと平田さんから、「ヤギを使ってなにかできるかもよ」と言われていたのに、そんなに活用できなかったな。もったいなかったなあ。生き物を飼うことから命について、農業とか文化についても考えてみたかった。もったいなかったな。

▶ のり

今は農園に鶏が2羽いるんですよ。なかなか活動に活かすことが出来ていないですよ。

農業と家畜は広がりそう。

▶ めい

もっと子どもたちが農業を身近に感じてほしかった。1か月単位だから、間がない。もっと日々の変化を感じられるように、芽が出たとか、情報発信もできたんじゃないかな。

参加者と学生のバランスがINCHのキャンプみたいに1対1じゃなくて、参加者を取り囲むみたいになっているのもどうにかしたいです。

▶ かほやん

理想という少しずれるけど、実際にやった中では「竹」をつかった企画がよかった。

今でも仕事でやろうと思ったけど、なかなか工具の準備や安全面での課題があって難しいから、農学校ではもっと取り入れてほしいな。

▶ こはるん

ちえのわに入るまで自然体験というか畑とかに関わってこなかった大学生でも、自然体験の楽しさを感じられるのが理想の農学校だと思います。地域の農家と連携し、大学生が農業体験をする機会を設けることやOB・OGと一緒に大人の農学校みたいなのも面白いかもしれません。

▶ かよ

大学生と子どもと一緒に楽しみながら学べるのが理想ですよね。私も地域の農家や専門家とつながって、より良いものができたらいいなと思います。大学の農園を最大限に生かし、大学生が知識を生かした企画を作れるようになります。

▶ ひっしー

いいね！全部やってみたらいいよ。みんなの話きいたらアイデアが出てきちゃって、私がしゃべると長くなると思うからって聞きたい？

農家見学、1期とか2期の頃にやってた。学生だけでも行ったこともあるよ。

あと、参加者とスタッフのバランスを改善するためには、リピーターいるでしょ、開催日増やして、農学校2年生コースとかやってみたらどうだろう。参加者のレベルは上がっていくし、そこに学生も企画もレベルアップさせていくイメージ。参加者と一緒につくっていく農学校は、参加者の枠を広げつつ、質も上がるような気がするなあ。

本当に初めて子どもたちには1年通して種から胃袋までをしっかりとって、2年目以降は、それぞれ研究チームとか。やることは2倍になってるように見えるけど やったらおもしろいんじゃない。

大学の中で完結しなくてよくて触れたいものがあるなら、農家に連れていってとか農業試験場にいったこともあったよ。自分たちが学ぶことで深みがでるはず。

農学校で江戸野菜の復活とか品種改良にチャレンジするとか、やってみたいなあ。

## ●最後にメッセージをお願いします

### ▶ ひっしー

結局、私がしゃべりすぎたところもあるけど、名残惜しいですが時間も迫ってきましたので、最後に今日の感想か、今の農学校を支える学生たちにメッセージをお願いいたします。

### ▶ かほやん

創設期の思いというか「ちえのわスピリット」を聞いてよかった。こういう機会でしかなかも深いところまでは伝わらないとおもうけど。私自身、4年間やって良かったと思ってるもの、楽しく全力でやったからだと思ってます。社会人になってから、自然を見る時の目の輝きをほかの方に褒められることがあって、農学校で五感を刺激しまくったからかな。

### ▶ のり

話をしている、遊ぶって言葉が頭から離れません。もっとやりたかったことがたくさんあるなあ。今の農学校は「農」から離れていってる気がする。自分と農業のつながりを考えてもらいたいし、もっとやりたいことを見つけるためにも、農園で遊んでほしい。

### ▶ ゆうすけ

自分が楽しいと思うことが多かった。まずは自分が楽しめる活動を探してみる。大学生の農学校を作り上げる話し合いは大変だろうけど、子どものために何ができるか、それぞれの時間とかコストを見極めてやってもらいたいなど。活動しか来ない人とかもいると思うけど、準備に取り組んだ人が一番得るものが多いと思う。

### ▶ こはるん

みなさんの話を聞いて、農学校はやはりいいものだ改めて感じました。もう大学生じゃないから、ちえのわに戻ることはできないけど、

農学校で得た体験を活かして、小菅のキャンプや自主的な活動を続けたいと思います。

### ▶ めい

いろんな話が聞けて楽しかったし面白かった。大学生のみんなが楽しんでほしい。子どもと一緒にいることが全てではないし、農業のことを突き詰めてもいいし、頑張ればなにかのプロになれるはず。

### ▶ かよ

最近は日中の気温がすごく高くて 35 度とかで農園に出るのがすごく危険な状態にあって、夏場は 16 時から 19 時とかちょっと時間を遅らせて夜の農園を楽しむみたいな企画もいろいろ考えながらやっています。

今回の話の中で農学校の形は変わってもいいっておっしゃっていただいたのはすごいがありがたいし、嬉しかったです。その環境に合わせて、農園を最大限有効活用できる農学校の形に変わり続けていくのがいいんじゃないかなってすごく思いました。

### ▶ ひっしー

ありがとうございました。いまでも参加者を「ちえっこ」、スタッフを「ちえんちゅ」って呼んでることがうれしかったです。短い時間でしたが、濃いお話をできたと思います。またお話できる機会を楽しみにしています

## おわりに

2年前に農学校について振り返る機会をいただいて自分なりの思いを小史に書き記したので、今回は農学校に関わってきた人たちに話を聞きました。農学校がどんなきっかけで始まり、そこに関わった人の思いを紹介することで、これから農学校をつくり支える人たちの一助になれば幸いです。

サークル「ちえのわ」にとって、「農学校」はひとつの手段であり、目的ではないと私は思っています。

参加する子どもたちにとって安全で安心して楽しく活動できる農学校であることが絶対条件。それを運営する学生やサークル「ちえのわ」として、どんな意味があるのか、「農学校の今」を支える人たちにとって有意義な場となりえているか、時々ふりかえって考えてみてはいかがだろうか。自然文化誌研究会は、「農学校」の共催者として、よりよい活動のために、学生の成長のためにどんなサポートができるのだろうか。まだまだできることがありそうです。農学校を通じた縁がまた新しい風となり、農園でのよりよい教育実践になることを切に願っています。

活動のきっかけと舞台を整えていただいた大学と先生方に感謝この活動に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。皆様のご協力とご支援がなければ、この活動を成功させることはできませんでした。それぞれの役割を果たし、時間と労力を惜しまずに尽力してくださったことに深く感謝しています。

菱井優介

